

稲作情報 No.6

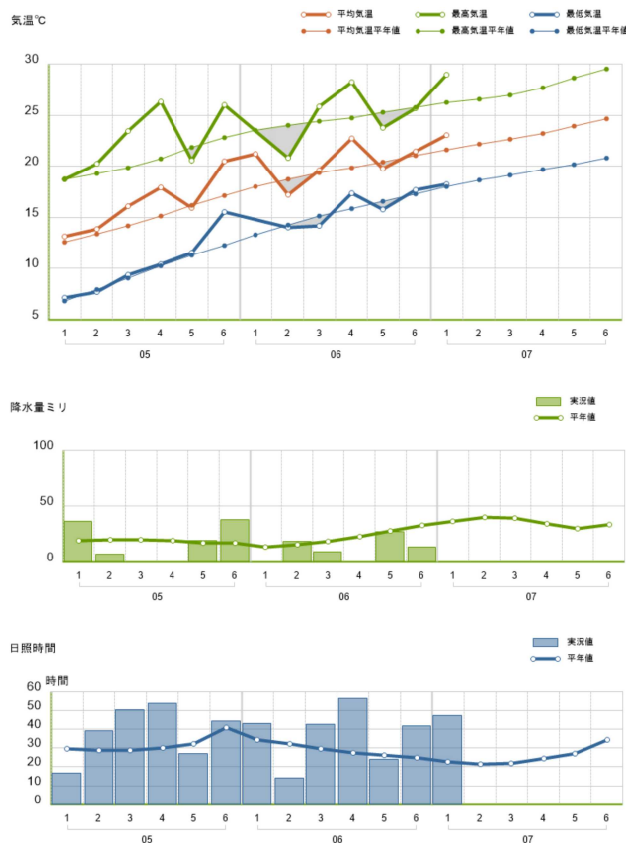
発行日: 令和8年7月8日
発行: 仙北地域振興局農林部農業振興普及課

生育は前進傾向！
～中干しは幼穂形成期前までに終了を～

1 気象経過と今後の気象予報

これまでの気象経過(アメダス大曲)

図1 半月ごとの気象経過(秋田県農業気象システムより引用)



向こう1か月の気象予報(7/4～8/3)

- ・仙台管区气象台より令和8年7月2日に発表された1か月予報によると、期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。また、同日に発表された高温に関する早期天候情報によると、7月8日頃からはかなり高くなる可能性があります。
- ・平均気温は高い確率が50%で、週別の気温は1週目(7/4～7/10)および2週目(7/11～7/17)は高い確率が60%、3～4週目(7/18～7/31)は高い確率が40%です。
- ・降水量はほぼ平年並の見込みです。

図2 東北地方 1か月予報(出典:気象庁HP)

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)		
気温	東北日本海側	向こう1か月 07/04～08/03
		1週目 07/04～07/10
		2週目 07/11～07/17
		3～4週目 07/18～07/31
	東北太平洋側	向こう1か月 07/04～08/03
		1週目 07/04～07/10
		2週目 07/11～07/17
		3～4週目 07/18～07/31
	降水量	向こう1か月 07/04～08/03
		日照時間
		向こう1か月 07/04～08/03
		向こう1か月 07/04～08/03

2 生育概況

【生育状況(7月6日水稻定点調査より)】

7月6日の定点調査結果(あきたこまち、10地点平均)は、草丈は50.1cm(平年比96%)で平年よりやや短く、茎数は562本/㎡(平年比112%)で多く、葉数は10.5葉(平年差+0.5葉)でやや

多くなりました。葉色（SPAD値）は42.2（平年比94％）で淡くなりました。

6月中旬以降、気温の日較差が大きくなったことで分げつの発生が促進され、茎数が少なく推移していたほ場では茎数は回復傾向にあります。

生育が前進しており、今後も気温が高く経過する予報であることから、時機を逸することなく栄養診断を実施し、適切な肥培管理や水管理に努めてください。

【幼穂形成期の予測】

日平均気温から算出した「あきたこまち（中苗）」の幼穂形成期（幼穂長2mmの時期）は、平年より3～4日程度早まると予想されます。

田植え時期により幼穂形成期予測に差があることから、各ほ場を確認し、当面の技術対策を参考に水管理や追肥の判断を行ってください。

表 「あきたこまち（中苗）」の幼穂形成期予測

アメダス 地点	田植月日			
	5月15日	5月20日	5月25日	5月30日
大曲	7月6日	7月10日	7月13日	7月17日
角館	7月7日	7月11日	7月13日	7月18日
田沢湖	7月12日	7月16日	7月18日	7月22日
大曲平年	7月10日	7月13日	7月16日	7月19日

※幼穂形成期：幼穂長2mmの時期（出穂25～30日前頃）

※7月6日以降は平年値を用いて試算した。

3 当面の技術対策

1. 今後の水管理

（1）中干しは幼穂形成期までに終了

○幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂粒数の減少を招くため、中干しは幼穂形成期前に終了し、間断かん水に切り替えます。中干し期間中の降雨により、中干しが十分にできなかった場合や生育量の不足により中干し開始が遅れたほ場では、中干し終了後は落水期間をやや長めにした間断かん水により、徐々に田面が乾くよう努めます。

また、中干し後の急激な湛水管理は根を傷めるため、間断かん水を行いながら土壤へ水分と酸素を交互に供給します。

○減数分裂期から穂ばらみ期にかけて平均気温20℃以下（最低気温17℃以下）の低温が予想される場合は冷害の危険性が増すため、幼穂形成期に入ったら水深10cm以上の深水管理（前歴深水管理）を10日間程度実施します。

（2）カドミウム汚染米対策を徹底しましょう

カドミウム汚染米が発生する恐れがある地域では、「あきたこまちR」以外の品種ではこれまでと同様に7月中旬～8月下旬（7月15日～8月25日頃）までの出穂前3週間、出穂後3週間の計6週間は、湛水管理を必ず実施しましょう。

詳細については、美の国あきたネットに掲載のカドミウム汚染米生産防止対策リーフレットを参照してください。

HPアドレス：<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/90269>

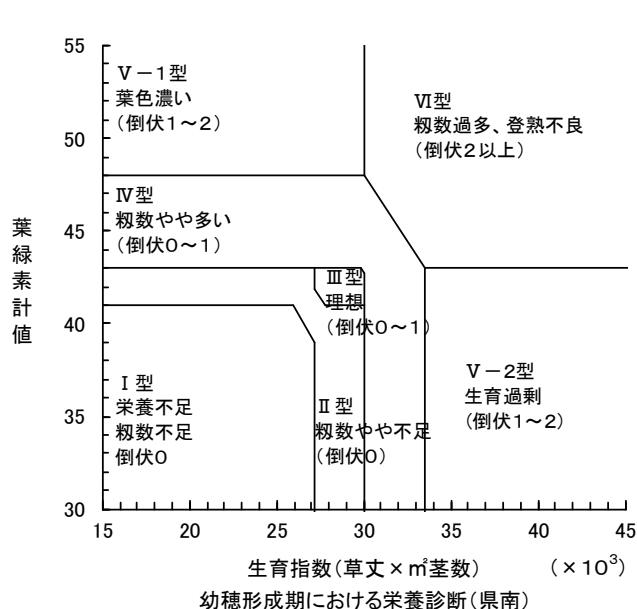


2. あきたこまちの栄養診断(追肥の判断)について

(1) 幼穂形成期における栄養診断と追肥の判定(品種:あきたこまち)

幼穂形成期の栄養診断に基づく追肥は、目標収量を得るために必要な粒数の確保の他、出穂期以降の葉色を維持することで高温登熟時の品質低下を防止するために重要な肥培管理になります。一方で、生育過剰な場合における追肥は倒伏の危険性が高まります。

適切な栄養診断に基づき、追肥の時期と量を決定しましょう。



生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I 型	2kg	2kg
II 型	2kg	2kg
III 型	ムラ直し1kg	2kg
IV 型	なし	2kg
V-1 型	なし	ムラ直し1kg
V-2 型	なし	ムラ直し1kg
VI 型	なし	なし

注) 目標収量 570kg/10a、あきたこまち

※幼穂形成期に葉色が濃く、草丈が64cmを超える場合は倒伏の危険性が高くなるので、追肥は控えましょう。

※基肥に緩効性肥料や有機質肥料を使用している場合は、ほ場の状況に合わせて追肥の有無、追肥量を判断してください。

表 幼穂形成期(7月15日頃)における「あきたこまち」の理想生育量(県南地区:稲作指導指針)

	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉数 (葉)	葉緑素計値 (SPAD502)	生育指数 (×10 ³)	栄養診断値 (×10 ⁵)
理想値	62	463	10.9	42	28.7	12.1
上限値	64	484	11.0	43	30.0	12.8
下限値	60	443	10.7	41	27.2	11.4

3. 葉いもちの発生に注意!

葉いもちの発生時期は早く、発生量は平年並の予報です。

BLASTAM(アメダス:大曲)の判定によると、6月22、23日に感染好適な気象条件が見られました。同時期に感染した場合、6月29日以降に病斑が確認されることが予想されます。ほ場巡回により発病状況を確認し、病斑を発見した場合は、直ちに予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン剤またはノンブラス剤)の茎葉散布を行いましょう。

4. 斑点米カメムシ類の増殖を抑える雑草管理

斑点米カメムシ類(第2世代)の発生時期は早く、発生量はやや多い予報です。

斑点米カメムシ類の増殖を抑えるため、草刈りは出穂の15～10日前までに、畦畔だけでなく休耕田や水田周辺の雑草地等の繁殖地を対象に、できるだけ地域で一斉に行いましょう。

水田内にノビエやホタルイ等の残草がある場合は、斑点米カメムシ類の水田内への侵入を助長するため、草種に合わせた中・後期除草剤を散布し、水田内の雑草に穂をつけさせない管理を徹底しましょう。

向こう1か月の気温は高いと予報されているため、今後の病虫害発生予察情報を確認しながら、必要に応じて出穂期24日後頃の茎葉散布を検討しましょう。

※病虫害の発生状況については、秋田県病虫害防除所が令和8年6月30日に発表した令和8年度農作物病虫害発生予察情報 第3号（7月予報）を引用。

5. 高温下における対策について～限られた水資源を大切に！～

- 出穂後10日間は湛水管理(水深5～6cm程度)とし、その後は間断かん水を基本とします。高温が予想される場合は、根の機能減退を防止するため、水の入替えにより地温の低下を図ります。ため池や沢水利用の地域で農業用水の不足が懸念される場合は、事前に地域内で用水の利用計画などを調整しながら、落水期間の短い間断かん水やかん水を日中に行うなど、高温時の水分供給と地温の低下に努めましょう。
- フェーン現象等で乾燥した風の強い日は、湛水管理を行い、蒸散による水分の消耗を軽減します。
- 早期に落水すると葉色の低下、枯れ上がり、根の機能減退につながるため、落水時期は出穂後30日以降とします。

6. 熱中症対策を徹底しましょう！

こまめな水分・塩分補給を心掛け、熱中症を予防しましょう。

また、作業の際は単独作業は避けて、できるだけ複数名で作業を行いましょう。時間を決めて連絡をとったり、休憩を取るなどしてお互いの体調を確認しましょう。

熱中症が疑われる場合は、速やかに作業を中断し、涼しい場所に避難するなどの応急処置をとってください。症状が改善しない場合は、医療機関を受診しましょう。

～秋田米栽培情報発信LINE始めました！～
水稻栽培に関する情報を発信しています。

秋田県農林水産部水田総合利用課

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/genre/suiden>



友達追加は
こちらから